

平成21年 3月 31日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006-2008

課題番号：18760392

研究課題名（和文） 都市景域の形成とデザインに関する研究

研究課題名（英文） Formation and Design of the Urban Landscape Area

研究代表者

出村 嘉史（DEMURA YOSHIFUMI）

京都大学・大学院工学研究科・助教

研究者番号：90378810

研究成果の概要：良質の景観のまとまりを有する場所としての景域には、時間をかけて領域的に発達したデザイン上の特徴がある。日本における景域設計の基礎をなすと思われる場所として、禅宗寺院本山の伽藍と塔頭を含む広大な敷地、参詣道を中心に発達した一連の町の領域、そして近代に一体的に開発された別荘郡の領域などを対象に、時代ごとに構築されて蓄積されたものを、歴史的資料や空間の調査から分析し、景域の形成過程と構成原理を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	270,000	3,070,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：土木工学・交通計画・国土計画

キーワード：景域形成、都市郊外、禅宗寺院、門前町、参詣道、近代住宅地、京都、英国

## 1. 研究開始当初の背景

観光立国というスローガンや景観法の制定によって、都市の景観がその重要性を高めてきた。しかしながら、「景観」は、単にカメラのスナップショットのように2次元の透視図的なものとしてのみ、捉えられがちである。実際の体験としての景観は、領域の特性として、より立体的で実質的な空間として評価されるべきであり、領域的なアプローチによって、いままで把握しきれなかった領域としての景観、すなわち「景域」をデザインする方法を具体的に探り、示すことができるだろう。

## 2. 研究の目的

価値の高い構造物や建築の単体にとどまらず良質の景観のまとまりを有する場所としての景域には、何らかの意図やモードによって成立し、時間をかけて領域的に発達したデザイン上の特徴があるものと思われる。これを探るために、現在にも良質の景域が見出され日本における景域設計の基礎をなすと思われる京都における場所として、禅宗寺院本山の伽藍と塔頭を含む広大な敷地、参詣道を中心に発達した一連の町の領域、そして近代に一体的に開発された別荘郡の領域などを対象に、時代ごとに構築されて蓄積された

ものを、歴史的資料（古文書・風景画・古地図など）及び空間の調査（デザインサーベイ、図面の作成、地形情報整理）から分析し、以下のように、景域の形成過程と具体的な構成原理を明らかにした。

#### (1) 禅宗寺院本山の景域形成

京都に多く立地する臨済宗の禅宗寺院本山の景域を対象とする。中世に成立して臨済禅の興隆とともに発達したこれらの寺院境内は、広域的な景域を一体的に創造した伝統的な構成法があり、日本の景域を解明する上で、きわめて重要な位置を占めるものと考えられる。境内では、主軸を成す大伽藍とそれを取り巻く塔頭群による基本的な構成が共通しているが、それぞれの立地している場所や宗教的な理由によって景観的な特徴は異なっている。建仁寺、南禅寺、妙心寺、大徳寺、東福寺、天龍寺を対象として、大伽藍から塔頭に至り、現在にもまとまりをもつ境内周辺における景域の構成原理を、空間的要素と形成思想の両面から明らかにすることを目的とする。

#### (2) 参詣道を軸とする門前町の景域形成

京都の山辺に複数立地する社寺とこれらをつなぐ参詣道を軸とする一連の門前町の景域を対象とするが、京都の山辺には参詣道としての特徴を強く有する道が明確にあり、また京都を取り巻く山々の中でも特に史料を多く残している、東山の祇園・下河原・清水周辺を対象とする。山辺に展開された名所を接続させるこの景域は、京都の風土の中で固有に発達してきた重要な構成を持つものと考えられる。実測や3Dモデルの分析による地形条件や、参詣道の発達の経緯、境内と門前町の空間的構成を調査し、景域の特徴およびその構成原理を、空間的要素と形成背景の両面から明らかにすることを目的とする。

#### (3) 近代住宅地開発の景域形成

近代の京都においては、社寺境内の上地に続く新たな開発、都市人口増加に伴う郊外の住宅開発などによって、都市周縁部に新たな景域が形成された。この時期に形成された景域には、現在に良質な場所として残る重要なものがある。これらの中でも、南禅寺周辺に形成された別荘群から始まり、鹿ヶ谷周辺、吉田山を含む、丘陵地形に囲まれた谷の領域に展開された住居地域の特異な景域を対象として、空間的要素及び次第に出来上がった住居のタイポロジーを分析し、この景域の構成原理を明らかにすることを目的とする。この際、英国地方都市の近代における郊外住宅地形成過程が対照として参考になるため、これを調査している。

### 3. 研究の方法

本研究の方法は、上記の対象毎に以下のよう

第一に、寺院境内や対象とする住宅敷地の周辺における敷地形成経緯の調査及び地理情報の収集を行った。例えば、大伽藍と塔頭が現在の構成に至る歴史的経緯、あるいは道や住宅敷地が現在の構成に至る歴史的経緯を、絵画史料・文書、及び歴史学分野及び建築学分野に散見する既往研究などを用いて整理した。次に地形データのCG（1/2500あるいは1/3000の地形図より入力し作成したもの）を用いて、現在および過去の地理情報を整理した。その際、実測と、絵画史料・文書などを用いて、各敷地データおよび経路データを作成した。

さらに意味的空間の成立した歴史的経緯を、先に明らかにした地理情報と相関的に把握しながら、対応する空間的特徴毎にまとめ、総体としての景域の構成を整理した。

以上の分析によって明らかにされたそれぞれの寺院周辺における景域構成を比較し、各固有性の要因になっている構成や、その背景を明らかにした。また、全ての事例を通して共通して見出せる構成上の秩序、クラスターの形成原理、自然の導入法などを抽出し、整理した。

### 4. 研究成果

#### (1) 禅宗寺院本山の景域形成

建仁寺、南禅寺、妙心寺、大徳寺、東福寺、天龍寺のそれぞれの景域において、現在および過去の空間情報を整理した結果、主要伽藍を中心にこれを取り巻く塔頭郡が、延長する経路および敷地背後の緑地を軸に幾つかのクラスターを形成しながら発達したことを概観できた。これらの初期の段階において、中世に表現されている十境（じつきょう）および偈頌（げじゆ：韻文の形で仏教の真理を述べたもの）と景域の構成の関係が深いことを見出した。特に天龍寺においては、境内と十境がほぼ同時に作られており、その偈頌を読み解くことで、作者夢窓疎石が意図した景域像のアウトラインが把握され（図-1, 2）、十境に描かれた世界観が、その後の景域設計のマスタープランのようなものとなっていた可能性を指摘した。

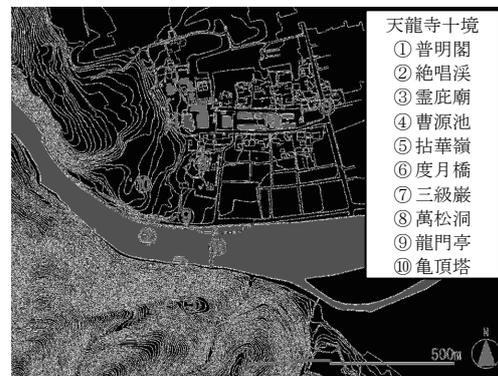


図-1 天龍寺における十境の配置図（筆者作成）

表-1 夢窓疎石の十境の構成と意味の重層性

住名	場所/地形	禪語一般	吉野の見立	法界的意味付	場の履歴
曹源池	方丈庭園	壺亀・水源	竜門山	法界	亀山殿薬草園
亀頂塔	龜山				亀山殿の視対象
龍門亭	山川辺亭	巨壺	竜門郷	(繋ぐ視点場)	亀山殿と類似の構成
拈華嶺	嵐山	壺山・花	吉野山	文殊菩薩・法界	吉野桜の植樹・亀山殿の視対象
三級巖	戸灘瀨瀧	龍門瀧			
絶唱溪	大堰川	激流	吉野川	諸仏の説法	亀山殿正面
度月橋	渡月橋	虹勢	吉野大橋	真理が渡る	法輪寺橋
霊庇廟	鎮守社	壺宮		本地垂迹	(石清水八幡)
普明閣	三門	(結界)		観音菩薩	
萬松洞	松並木	桃源入口		法界=理想郷	松並木

(2) 参詣道を軸とする門前町の景域形成

京都の山辺に複数立地する社寺とこれらをつなぐ参詣道を軸とする一連の門前町の景域として東山の祇園・下河原・清水周辺を対象とした。山辺に展開された名所を接続させるこの景域は、京都の風土の中で固有に発達してきた重要な構成を持つ。

対象地域内には、多数の有名社寺が存在しており多くの参詣人が訪れていたため、中世に入ると、周囲に参詣人を目当てとした町が発展した。近世に入ると幕府による社寺の復興や移転が行われ、それを契機に各門前町が確立した。近世中期には対象地域内で新町の開発が盛んになり、初期の門前町を繋ぐような形で新たな市街地が形成した。開発後の土地は茶屋や旅籠屋や店屋として利用され、その結果、近世後期には参詣道沿い一帯を参詣客が行き交う様になった。本研究では、特に社寺境内において発達した席貸の空間構成を、文書資料から読み解いて明らかにした(図-3)。

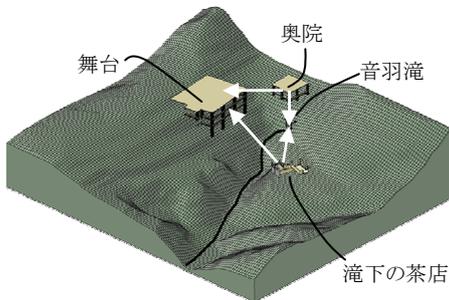


図-3 清水寺奥院・滝下茶店の構成(筆者作成)

また、18世紀中葉の本居宣長という個人の目を借りて、門前町が形成されて名所巡りの景域「清水祇園あたり」を形成しはじめる頃の行楽の空間の構造を明らかにした。すなわち同時代の地図資料、絵図資料から領域の敷地及び経路の構成を把握した上で、本居宣長『在京日記』(1752-1757)の全記述から体験内容を読み解き、行楽の拠点となった場所と、宣長の足取りの特性を分析した。その結果、宣長によって経験された同景域における、細かなループ状の経路が幾つも重なりあい社寺境内と門前の両方を渡り歩く路傍に4種類の行楽の拠点が配置されている構造が見出され(図-4)、それぞれの拠点における場づくりの性質が示された。

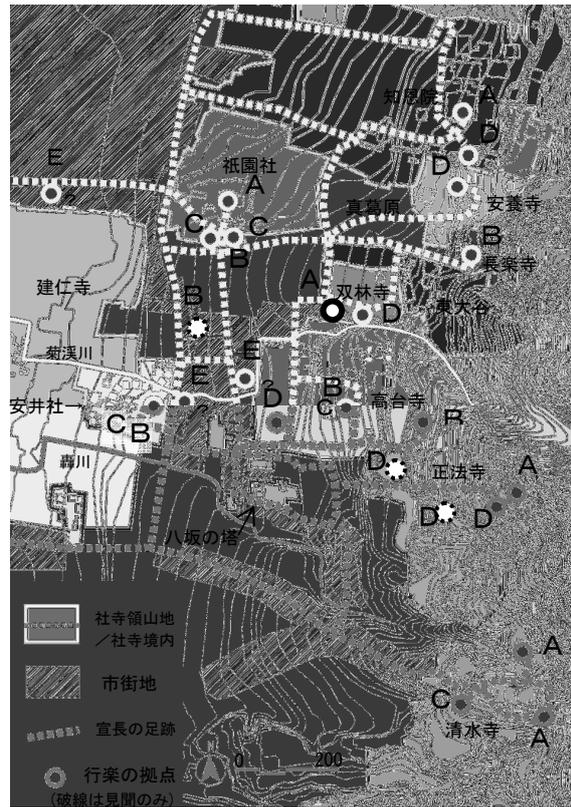


図-4 本居宣長の足跡と体験された行楽の拠点(筆者作成)  
A: 礼拝, B: 床几, C: 茶店, D: 塔頭, E: 座敷

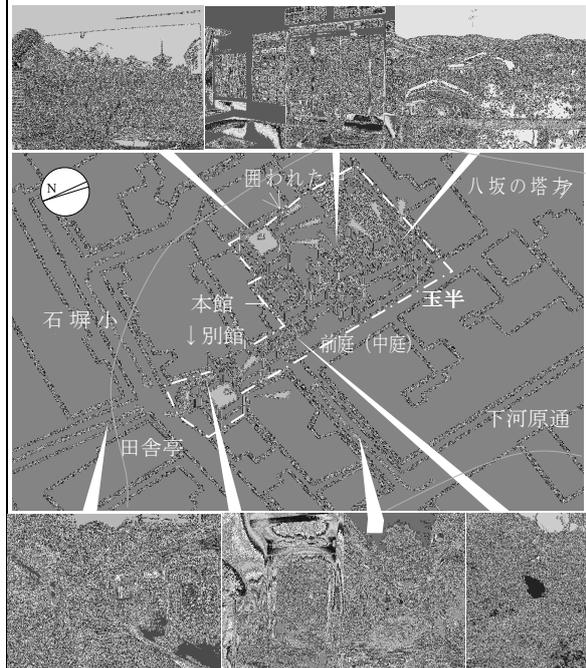


図-5 玉半のアプローチ及び室内からの眺望

さらに、同地域において現在の座敷(座って留まる所)に着目し、地形環境から建築内部に至る連続的な空間の構成と、それ故に得られる眺望を調査して(図-5)、現在同地域に展開している座敷における景色を愉しむための空間の傾向を明らかにした。座敷を提

供する茶屋・料理屋・旅館・茶屋など 20 店舗を対象に、1) 地形と敷地の配置、2) アプローチの特徴、3) 座敷の位置づけと眺望の特徴、によって分析した。その結果、地形的特徴と強く結びついた、景色を愉しむための座敷の 8 つの構成パターンが見出され、これらが領域的に分布していることが示された (図-6)。さらに J. アルトンが示した隠れ場・眺望の原理に従っているとも見られるこれらの構成は、おかれる時代背景によって、より多様な通時的変容を遂げている可能性が示された。

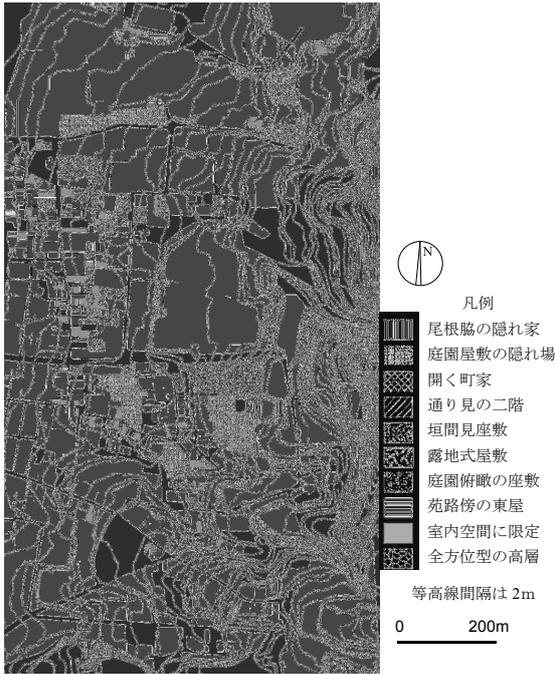


図-6 対象地域の座敷の眺望パターン分布 (筆者調査)

### (3) 近代住宅地開発の景域形成

近代の京都における郊外の住宅開発として、南禅寺周辺に形成された別荘群から始まり、鹿ヶ谷周辺、吉田山を含む、丘陵地形に囲まれた白川の谷領域 (図-7) に展開された住居地域の特異な景域を対象に、空間的要素及び次第に出来上がった住居のタイポロジーを分析し、この景域の構成原理を示した。

この領域における近代の別荘開発の顛末については、著者によるものを含んで幾らかの既往研究がある。そうした成果を時系列で整理すれば、明治 23 年竣工の琵琶湖疏水建設以降、南禅寺福地町・下河原町あたりを発端に、北へ伝播して吉田山へ至る敷地開発の流れを概ね掴むことができる。これらの一連の開発の初期の例として、琵琶湖疏水の付帯施設のインクライン建設によって周囲から隔絶されたエリアに、まず着目した。

ここでは、場所の意味の読み換えによって、圍繞感の高い理想的な住居地域として開発され、稲畑勝太郎らによって庭園屋敷が造営

された。さらに留意すべきは、こうした敷地の外における歩行者の往来する小径の開発であり、周囲の敷地がその一部を開放するようにして、この小径に対する造形を行っていたことが示された (図-8)。

また、同様の小径は、白川による谷の一連の開発の中で、各所に設けられた。その形成原理としての趣味は、近代数寄に求められると考えられ、各所で開発された庭園別荘・庭園屋敷は、その敷地内に留まらず、広い景域に対して具体的に働いていたことを示した。

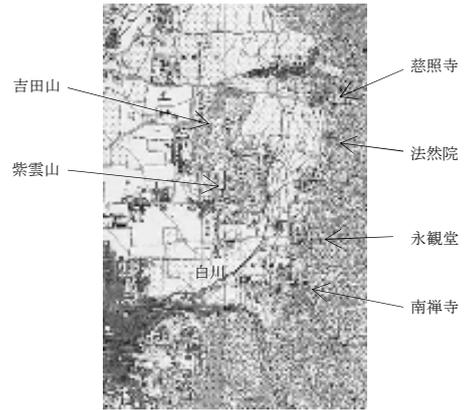


図-7 住宅地開発以前の白川による谷の領域

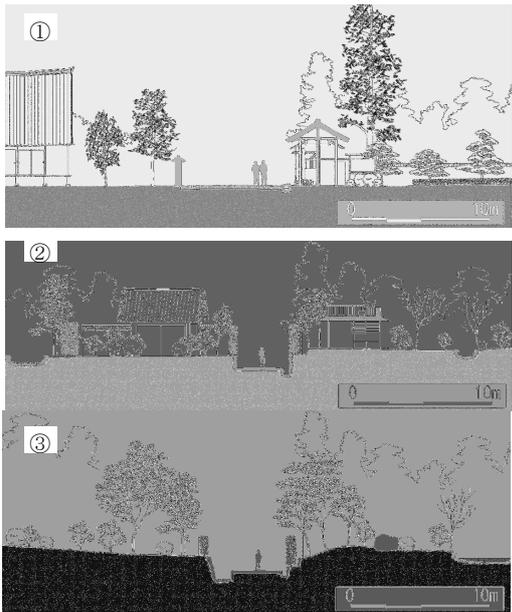
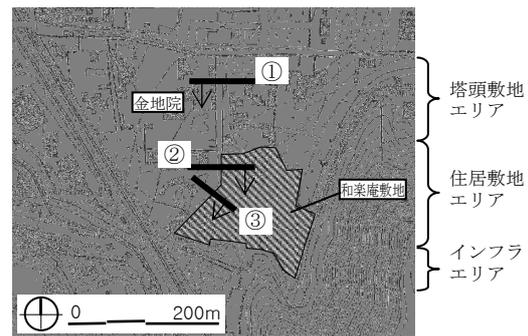


図-8 南禅寺福地町の小径と周囲の断面図

#### (4) 英国都市郊外の開発による景域形成

英国近代における郊外（主に京都と立地条件の類似性を持つ Sheffield）の開発を対象として、その成立経緯の調査、さらには周辺における景域構成の調査を行った。

広域的な住宅開発によって成立した地域の成功の条件として、歩行圏の景域として捉えられることが重要であると考えられる。英国では、歩行圏の景域の基盤となる適切な規模の集落が、19世紀半ばに既に多く開発されていた。一つの景域のサンプルとして、Sheffield 北西部にある Walkley 地区に焦点を当てた。この地区における歴史的事項の情報を調査し、その Morphology を地形の上、敷地構成の上を示した。

19世紀初頭には、丘陵地は農場と採石場のみが広がるエリアに点在する小さな集落および、その下の村があるのみであった。1834年から1841年まで Sheffield を代表する詩人エリオットが住んだ住居がある。そこは、その後が開発される地域の最南端にあたる場所であったが、当時は市街地の限界にあたる場所であった。当時の地図から判断すれば、周囲は市街地から少し離れた自然と都市の境界であり、市街地へ目を向ける住居の配置がエリオットに好まれた。

19世紀半ばには英国の工業都市周辺で、フリーホールランドソサイエティ（FHLS）による開発が盛んになった。FHLS のシステムは、大地主から共同でまとめた土地を買い取り、それを会員で順に分配、開発するというものだった。Walkley における開発（図-9）は、1840年頃から始まり、202エーカーという広大な土地が開発されたが、それらは独立した多数の FHLS によって行われた。一つには、都市人口の過密が直接的な原因としてあるが、丘陵地の往来の不便さを受け入れて、住人が自ら見晴らしのよさや新たな風景を求めて郊外が開発された時期であり、それは Fir View や Rivelin View など、「View」の語が付くソサイエティの名称が表れている。

工業化による都市の社会構造が変化する中で、英国全土において様々な生活環境改善の実践が行われたが、ジョン・ラスキンは、寄付を集めて、理想的な土地経営を目指したギルド、セントジョージを1871年に創設した。1877年に正式に発表された「目的と規則の要約」では、このギルドを、正直な善人が不正や悪から解放され、収入の1割程度を提供して、理想的な農地を拓くために土地を購入するものとしている。その労働者を教育するための学校やミュージアムや図書館を作ることも目的とした。1875年に Sheffield を訪れたラスキンは、その年のうちに、Walkley にミュージアムを創設した。

GIS 上で地形情報を読み込み、ミュージアムの立地点からの視線の届く範囲（可視領

域）を表示したものが図-10（図中、「R」で示された点がミュージアムの立地点であり、赤い部分が可視領域である。同時に「E」はエリオットの家で濃い茶色部分がそこからの可視領域である（S と肌色領域は説明を割愛）。FHLS による開発は、工業によって劣悪な環境になっていた低地部から離れた高台に、眺望のよい住環境を創造したが、特にミュージアムの立地する場所は、市街地と反対側に広がる谷間を望んでいた。郊外といえども町の中心部と視野を共有したエリオットの家よりも、徹底した新境地であったことを示した。

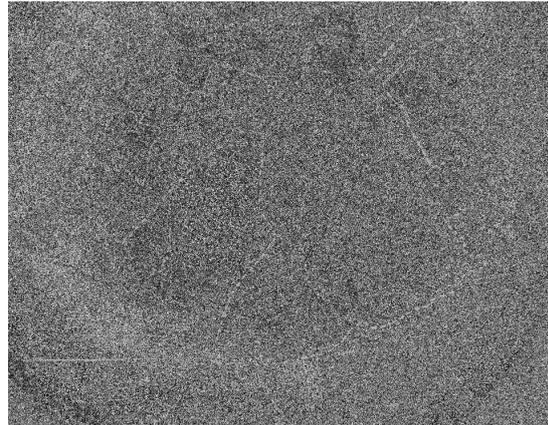


図-9 Walkley における FHLS で開発されたエリア

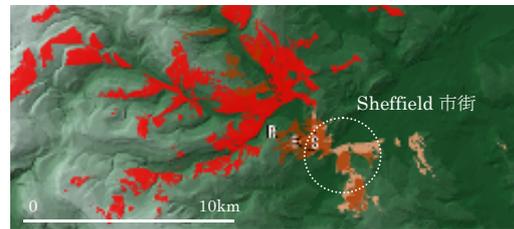


図-10 GIS による各地点からの可視領域の表示

#### (5) まとめ

以上のように、現在にも良質の景域が見出される禅宗寺院本山の伽藍と塔頭を含む広大な敷地、参詣道を中心に発達した一連の町の領域、そして近代に一体的に開発された別荘郡の領域、さらには英国 Sheffield の住宅開発などを対象に、時代ごとに構築されて蓄積されたものを、歴史的資料（古文書・風景画・古地図など）及び空間の調査（デザインサーベイ、図面の作成、地形情報整理）から分析し、それぞれにおける景域の形成過程と具体的な構成原理を明らかにした。

禅宗寺院本山における十境のような景域作りは、モノに付随する重層的なコトのデザインであり、和歌に読む空間のような人による情緒をともに創出する日本の景域創造の古典的なものであると考えられる。以下人に受け止められる景域という視点によって、そ

のための空間創造の実例をまとめることができた。

本研究では、都市郊外の事例が多くなったが、一口に郊外と言っても、時代や国などによる受け止められ方の違いによって、その多様性を説明できる。英国では、自然に対する目が近代に拓かれ（これは後に田園都市へと変容したものと思われる）、京都においては、郊外における数寄の空間づくりが基調にあった。この両者に文化交流による相関がある可能性もあり、興味深いが、それは今後の課題とする。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 神山藍, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦, 京都北山の山容景観についての考察, 土木学会論文集D, Vol.64 no.2, pp.266-278, 2008, 査読有
- ② 出村嘉史, 大住由布子, 川崎雅史, 樋口忠彦, 本居宣長『在京日記』にみる行楽地としての東山景域の構成, 土木学会論文集D, Vol.63 no.2, pp.158-168, 2007, 査読有
- ③ 出村嘉史, 荒川愛, 樋口忠彦, 天龍寺における十境と景域に関する研究, 都市計画論文集, No.41-3, pp.529-534, 2006, 査読有

〔学会発表〕（計7件）

- ① 出村嘉史, 散策する景域の骨格としての小径の計画（招待講演）, 第37回土木計画学研究発表会, 2008.11.2, 和歌山大学
- ② Yoshifumi Demura, The Process to Form the Landscape on Hillside in Kyoto: In the Japanese modern period from the end of 19th century to the early 20th century, EAST AND WEST: HISTORY OF ARCHITECTURE AND LANDSCAPE, The 2nd One Day Seminar at School of Architecture and Department of Landscape, the University of Sheffield, 2008.1.16, The University of Sheffield
- ③ 北野琢人, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦, 土地造成シミュレーションによる修学院離宮上御茶屋の敷地選定についての景観的考察, 第3回景観・デザイン研究講演会, 2007.12.9, 早稲田大学
- ④ 山口敬太, 西本慎太郎, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦, 詩仙堂における圍繞と眺望の景観特性に関する研究, 第62回土木学会年次学術講演会, 2007.9.14, 広島大学

- ⑤ 大島充功, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦, 天龍寺周辺における山容景観の特性に関する研究, 平成19年度土木学会関西支部年次学術講演会, 2007.5.26, 大阪大学
- ⑥ 八木弘毅, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦, 東福寺境内における伝統的な景域の構成, 第61回土木学会年次学術講演会, 2006.9.22, 立命館大学
- ⑦ 八木弘毅, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦, 東福寺境内における自然の見え方に関する研究—来訪者の視点から—, 平成18年度土木学会関西支部年次学術講演会, 2006.6.18, 神戸大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

出村 嘉史 (DEMURA YOSHIFUMI)  
京都大学・大学院工学研究科・助教  
研究者番号：90378810